ベンケット道路

フィリピンの軽井沢と言われるバギオは〝夏の首都〟とも呼ばれる。三月から五月の夏の間だけ暑い首都マニラの政府機関がバギオに移されることもあるからだ。

マニラの北二百五十キロにあり、標高千五百メートル。年間の平均気温は二十度、バギオは避暑地として最適である。

一五一九年、マゼランはスペイン国王の命を受け、世界周航の旅に出発。一五二一年、フィリピンのセブ島に上陸したが、対岸のマクタン島で先住民に殺された。

この事件を契機にスペインは遠征隊を送り込み、一五七一年、マニラを征服した。以来約三百三十年間、フィリピンはスペインの植民地であった。

しかしスペインとアメリカの戦争の講和条約で一八九八年からはフィリピンはアメリカの植民地となった。

暑い夏のマニラに耐えられないアメリカ人は避暑地としてバギオの開発を始め、一九〇〇年（M33）マニラからバギオへの道路工事が始まった。

標高千メートルから千五百メートルのベンケット州山岳地帯に達すると、岩山の斜面の道路工事は難航を極めた。

一九〇三年（明治三十六年）これを打開するため任命されたのがケノン少佐である。

彼は、それまでフィリピン人と中国人労務者でしていた工事を日本人労務者に切り替えた。

彼の頭にはカリフォルニアの荒地を花園に変えた勤勉な日本人以外にこの工事を完成させられないという強い思いがあった。

当時、フィリピン人の労務者の日給は五十センタボ（一ペソの半分）だったが、ケノン少佐が日本領事館に提示した条件は一ペソ二十五センタボ、石垣築造者二ペソ、労務監督者二ペソ五十センタボという高額なものだった。

こうして日本から労務者が集められて最盛期には二千人に達し、それに伴って犠牲者も七百人に及んだといわれる。

こうして完成したバギオへの道は「ベンケット道路」とも「ケノン道路」とも呼ばれ、日本人労務者が造ったとされている。

今回、この道路を通ってバギオに行ったが、道路建設の経緯を知ったのは今回の旅行中であった。

たまたまマニラの観光名所、サンチャゴ要塞で日本人高校生のグループに出会い、彼らが植林ボランティアとして来ていると聞いてびっくりした。

一九四二年から敗戦までの三年間、日本はフィリピンを舞台に激しい戦闘を繰り広げた結果、フィリピンの山々は多くがはげ山となった。

その償いの植林ボランティアで、日本人、現地案内人の手書きのチラシにベンケット道路の経緯が詳しく書かれていた。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

斜面は雨のたびに崩れる

山の斜面を刻んだベンケット道路